

CHIKUMA SHINSHO

使える四字熟語

村石利夫

Muraishi Toshio

ちくま新書

258



ちくま新書

258

使える四字熟語

二〇〇〇年八月二〇日 第一刷発行

著者 村石利夫（むらいし・としお）

発行者 菊池明郎

発行所 株式会社筑摩書房

東京都台東区蔵前二・五・三 郵便番号 一一一・八七五五
振替 〇〇一六〇・八四二二三

装幀者 間村俊一

印刷・製本 株式会社精興社

ちくま新書の定価はカバーに表示してあります。

ご注文・お問い合わせ、落丁本・乱丁本の交換は左記宛へ。

大宮市櫛引町二・六〇四 筑摩書房サービスセンター

郵便番号 三三二・一八五〇七

電話 〇四八・六五一・〇〇五三

© MURAISHI Toshio 2000 Printed in Japan

ISBN4-480-05858-3 C0281

ちくま新書

使える四字熟語

村石利夫
Muraishi Toshio

使える四字熟語【目次】

まえがき

007

第一章 ポピュラーな四字熟語

011

第二章 解釈の分かれる四字熟語

063

第三章 仏教・古典の四字熟語

083

第四章 日本人がつくった四字熟語

099

第五章 伝承の四字熟語

119

第六章 エピソードをもつ四字熟語

181

索引

233

凡例

- 一、原則的に各章ごとに五十音順に配列した。
- 二、★★★ 使用頻度のもっとも多い四字熟語。漢字検定試験準二級対象。
★★ 使用頻度中程度の四字熟語。漢字検定試験二級対象。
★ 使用頻度は少ないが重要な四字熟語。漢字検定試験一級対象。
- 三、「鴻門之会」を「鴻門の会」としたように「之」を「の」とした。
- 四、類には同義の熟語や故事成句を掲げた。
- 五、書物は『』。論文、雑誌、詩歌のタイトルなどは「」。

まえがき

漢字検定試験に挑戦する人たちをもっとも悩ませているのが、漢字四字熟語である。日本語の中で漢字だけで四字を構成している言葉は少ない。つまりほとんどが中国からの輸入語（ローン・ワード）のため、多くの人は、漢字四字を見るだけで、むずかしいと思ってしまうようである。その数は日本に渡来したもののだけでも二〇〇〇以上を数え、中国にある専門の辞典には万にのぼるものが集録されている。

なぜそのように中国に四字語が多いかというと、詩歌が興隆しはじめようとしていた紀元二〇〇年代、つまり三国時代のそれが四句からなる絶句（漢詩の一種）でまとめられているからともいえよう。そして四字が生活するうえでの熟語としてもっとも使いやすかったのか、五代時代に子供を教育するための本としてまとめられた『蒙求』^{もうぎゅう}が、すべて四字句の韻語で配列されていることにも影響されている。

また漢語はそのほとんどが二字熟語で構成されている。その二字を強調したり、意味を補うために生まれたのが四字句である。「天変地異」^{てんぺんちい}「揣摩憶測」^{しまおくそく}などがそれで、上下同意語が圧倒的に

多い。上の二字熟語が古くなってわかりづらくなったため、下に同義の二字熟語をつけてわかりやすくしたというのが、中国語の特徴といえよう。

一方で、四字句そのものが名句となっていて、それを知っていることが教養の一つにもなっている。漢字検定挑戦者は四字熟語を勉強しなければならない。「一石二鳥」いつせきにちよう「盲亀浮木」もうきのふぼく「後世可畏」せいおそるべし「門前雀羅」もんぜんじゃくらのように、エピソードを圧縮したり、文章を四字化したものが少なくないからである。そのために、本書で採りあげた四字句の中には、熟語ばかりでなく、「鴻門の会」「万里長城」のように、歴史を知るために採用したものもあることを付記しておきたい。

四字熟語の最大の特徴は、だらだら文章を凝縮できることと、表現したい状況を的確に伝えられるところにあるといつてよい。したがって文章を書く人にとって大切なのは、必要な場に来たとき、いかに適切な四字熟語を思いだせるかにあるといつてよい。横文字の場合、聖書、シェイクスピア、ダンテなどの文章を長々と引用するが、漢字圏の人びとはこの四字熟語を引用すればすむといえよう。

古代から漢字に影響されつづけてきた日本人であるが、作家の中でも好んで使う人と使わない人に大別されるところが興味ぶかい。たとえば漢学に通じていたと思われる夏目漱石は、四字句はほとんど使っていない。

反対に、幕末、蘭学を修め、かんりんまる威臨丸にのつてアメリカへ行ったのちヨーロッパを見聞してきた

福沢諭吉は、その旅行記の中で漢字四字句を縦横に駆使している。しかし、それらは「石室鉄橋^{ヒルディング}」のように自分で作ったものが圧倒的で、今や形骸化したものが多く、引用して使うことができない。福沢以降、四字句をひんぱんに使う人としては、尾崎紅葉、吉川英治、司馬遼太郎などがあげられる。

漢字力の低下が叫ばれて久しい。その原因はどこにあるかというところ、敗戦後アメリカからの押しつけ教育政策によって新制大学が誕生したときに、二、三の総合大学を除いて、漢学科が廃止されたためである。漢字を知らない大学卒業生が街にあふれ、彼らはマンガばかりを読むようになったので、いまだにマンガ・ブームがつづいている。しかし悪いことばかりではない。ワープロ、パソコンの時代が到来し、いやが応でも漢字と接触しなければならなくなった。

ワープロを打つためには漢字を知らなければ選別できない。日本語の九〇パーセント以上が借用漢字だからである。そのうえ文章の中にはよく四字句が使用される。本書はそこに存在価値を見いだすことができよう。これからのパソコンには、本書が採用した四〇〇則の四字句を組み込んでおく必要があるといえよう。

二〇〇〇年四月吉日

村石利夫



【第一章】

ポピュラーな四字熟語

★★★悪事千里（あくじせんり）

出典は中国北宋の逸話集『北夢瑣言』ほくぼうさげん。「好事は門を出ず、悪事は千里を行く」とある。日本では、悪い評判はすぐに遠くまで知れ渡ってしまうので、日頃の己の言動は慎めという戒め。

イギリスでは、III news runs apace.（悪いニュースは猛烈な勢いで走る）という。これを日本では「人の口には戸を立てられない」という。（出典は『最明寺百人上臈』）

■「天網恢々疎てんもうかいかいそにして漏らさず」↓五二頁。単に「天網」とも。

★★悪戦苦闘（あくせんくとう）

苦しい戦いをする事。悪戦は羅貫中『三国志演義』に「われは悪戦する者を見る」とある。上下同意語で、苦闘のほうは正史『晋書』しんじよ（陳稜伝）ちんりやうに「未の刻に至り、苦闘の息が……」と。

漢の皇室の流れを汲むという劉備玄徳は、蜀の国に入って三国鼎立ていりつを果たすまで悪戦苦闘の連続であった。すぐれた軍師、諸葛孔明を迎えたのちも、悪戦苦闘しながら寡兵でよく戦い、大國魏とつねに互格の勝負をつづけていた。

★★★暗中摸索（あんちゅうもさく）

出典は朱子学の大系を著わした『朱子全書』。「暗」は暗闇。「摸索」は手探りでさがすことの意味。何の手がかりもない物事を、どうしてよいか分からぬまま、あれこれとやってみること。転じて、当て推量であてはめる意にも使う。摸（さぐる）は常用漢字にないため、「暗中摸索」でもよいとしているが、これは本来なら間違い。模に「さぐる」の意味はない。

題「五里霧中」↓七三頁。

★★唯々諾々（いいだくだく）

出典は『韓非子^{かんぴし}』。戦国時代の法家、韓非子の著作をまとめたもの。「唯」「諾」共に応答の言葉、「はい」。事のよしあしにかかわらず、どんな事でも人の言葉に従うこと。人の言いなりになること。何でもはいはいと従うさま。「〱として従う」と用いる。吉川英治『新・水滸伝』（二）の中で、「劍把^{けんば}をたたくと、人々は、もう顫えあがって、唯々諾々と、彼の命のままうごくしかなかった」とある。

★★★以心伝心（いしんでんしん）

仏教書『伝灯録』が出典。「心を以て心に伝え（文字を立てず）」という禅宗の教えで、深い悟りの極意を心から心へ伝えることに由来する。文字や言葉を使わなくてもお互いに気持ちを通じ合うこと。禅家がよく用いる言葉に、韓非子の「一手独り拍てば、疾しと雖も声なし」がある。すべてのことは相応じるものが必要ということ。ありがたい教えも以心伝心で伝える相手が必要。

類 「不立文字」（文字を立てず）
ふりゆうもんじ

★★★一字千金（いちじせんきん）

出典は司馬遷の著わした歴史書『史記』。秦の呂不韋りよふいがその著『呂氏春秋』を都の咸陽かんようの城門に千金を添えて置き、この書の一字でも添削できた者には千金を与えようといって、自信を示した故事。たった一文字であってもそれが表す意味は千金の価値があるということ。また、文章がすぐれているときにも用いる。『呂氏春秋』は一種の百科事典で、道家、儒家などの説も入っている。二十六卷二十余万語からなり、「十二紀」「八覽」「六論」に分かれている。

★★★ 一網打尽（いちもうだじん）

出典は中国の歴史書『宋史』^{そうし}。ひと打ちした網で群れなす魚を取り尽くすように、一挙に根こそぎにしてとらえること。悪党の一味などを一度に全部捕らえるたとえ。

宋の魏泰撰、十五巻からなる『東軒筆録』^{とうけんひつろく}には、「劉元瑜^{りゅうげんゆ}、すでに蘇舜欽^{そしゆんきん}を指弾し、連座するものはなはだ多く、俊才の者も同時にあり、これを同類となし、劉元瑜は宰相に見えて曰く、相公のために、これを一網打尽とせん」と。

★★ 一氣呵成（いっきかせい）

■ 「一氣可成」

出典は清の六代皇帝、高宗弘暦の言葉を文章化した『清高宗（文）』^{しんのこうせう}。「一氣」はひといき。「呵」は息を吹くこと。文章をひといきに書き上げること。また物事を中断しないで一氣になし遂げること。職場では、「これを一氣呵成に仕上げてくれ。必ず今週中にな」などと使う。

■ 「一瀉千里」^{いつしやせんり} ↓六五頁。